

先生と子どもとの人間関係 ②

絵画製作を通して

井戸垣 弥生

多くの幼稚園や保育園で絵画製作は、音楽リズムと並んでたいへん重要視されています。一日のプログラムの中で自由あそびの時間はほとんどなくとも、これらのどれかは必ず行なわれています。したがって幼稚園保育園で絵画製作や、音楽リズムを通しての先生と子どもとの人間関係のあり方は、子どもとの人間形成に、非常に大きな影響を与えていることとなります。それで絵画製作場面の例をいくつかあげながら、先生と子どもとの人間関係について考えてみたいと思います。

○絵画製作の目標

絵画製作の目標として今日多くの方々があげていることは、ことばや文字によって十分に自分を表現できない子どもが、絵や製作を通して自由に自分自分の体験、願望を表現する喜びを味わうということです。絵や製作に、子どもの全人格、全生活が生きいきと表現され、自分を表現する喜びを味わいつつ、想像力、創意工夫の力、観

察力などが養われていくことが望まれています。

いつも家庭でも幼稚園でも、いっしょうけんめい表現しても、ことばではなかなか自分の思うことが相手にわかってもらえない子どもたちは、全勢力を傾けて創造した絵、粘土細工、箱積木の家、砂の池に対して(砂の池の例)「あら、Aちゃん、すてきなのができたわね」と先生から声をかけられた時、どんなに瞳を輝かせるでしょう。自分がわかってもらえた喜び、「ぼく白鳥のうちつくったの、その上にミルクやるの」とうれしそうに話してくれます。「Aちゃん普通のていぼう?」「普通のね、こういうのね、ていぼういらなんだもん、コンクリートだから」「あらそう、あれは何かしら?」「A男は水を二はい汲んで来て流します。「あああーあー流れてくるわよ、そこからうまいぐあいに流れてくるわよ、あら穴があいているの。どこからでも水が流れてくるのね」という先生の驚きの声に、苦労して二十分もかかって、どこからでも水の流れる池をつくったA男は満足そうに水をみています。

〇二つの人間関係

幼稚園でも保育園でも指導製作が非常に多く行なわれています。自由製作、工夫製作の場面をみせていただけの機会はないへんまれました。

△例1 V

先生「今日はめがね入れの製作をします。一番さき、一番小さい赤ちゃんの色紙にのりをつけて、ボール紙にはります。一番小さいのを二本に折ってください。」先生が折ってみせる。
「T子ちゃん」よそ見をしている子に注意。先生は机の間をぐるぐる歩きながら子どもが折るのを見る。

A男「先生できた」

B子「先生できた」

先生「折れたら机の上においてだまっていますよ。」先生の指図と違った折紙を折った子に先生「これはC男ちゃん、一番小さいの？ この一番小さいのを折りましょう。」

△例2 V

先生「今日は十五夜お月さんの製作をします。注意することなんでしょうか。」

D男「お友だちとぐちゃぐちゃ話したりしない。」

先生「そうね、切つてはいけませんと言うときも切つてしまつたりお月さまの色ましがつたらいけないからよく聞いてください。」月や、うさぎや、たぬきの印刷された画用紙を配り、製作の準備ができてから「お月さまの色みんなの頭の中で思い出

して、お口に出してはいけませんよ。」黒板に画用紙をはり、「先生は赤でひきますからよくみていてください。みんなは赤でかかないでいいですよ。今先生が赤でかこつたところは色をぬらないでください。一つお約束できましたよ。このまわりをお月さまの色でぬってもらいます。まだお口に出してはいけないのですよ。終つたらたぬきさん、たぬきさん終つたらうさぎさん、うさぎさんの色はその十二色の色にないと思いますから、うさぎさんに近い色でぬってください。ぬる時はね、はみだす子はあるまい子ではないんですよ。あわてないでください。お時間十分にあります。はい始めてください。」

この二つの例と次の例と比較してみよう。
△例3 V

子どもたちは、自由画をかいている子、箱積木で遊んでいる子、野球をやっている子さまさま。

先生は画用紙とクレパスを持って来て机にすわり、色をぬり始める。近くにいた八人の男女児が先生の周囲に集まる。

先生「ここへ好きな絵をかくのよ。クレパスがいいのよ。白いところが残らないように」といいながら色をぬる。

A子「先生紙ちょうだい。」

先生「はい」と紙を渡す。

A子「先生もよう？」

先生「もようじゃなくてもいいのよ、何でも。」

次々と子どもたちが紙をもらいに来る。

先生「きれいにならないわね、ねずみ色が悪かったのね」とね

ずみ色にぬったところを細い鉛筆ぐらいの竹の棒でけずってみる。(色をぬった上から竹の棒でけずって絵をかく)

J男「ぼくこい青ぬる。」

先生「ああそれがいいわね、失敗したわ。あのね、こい色の方がいいですよ、うすい色だとよくかけない。J男ちゃんみたいな色だといいわね」と大きな声でいう。席へもどったE夫「ねずみ色はだめだって、先生もしてみただけどうすいから」とF夫に言う。

F夫「これでいいんだ。ああおもしろい。これだ、これ一番よくつくぞ。」自分の色を自慢する。

一色を全体にぬる子、数色をもよようにぬる子などいろいろある。

I夫「こくぬらなきやいけないんだよ。」

H夫「ぜんぜん白いとこないようにしなくちゃ。」

二人同じようにぬっている。

I夫「ほらぬれた。こういう色きいてこよう」と他の机の子に見せに行く。

A子「オレンジより、こげ茶の方がいいわ。」

K男「先生ほら」(こげ茶一色にぬった子)

先生「ものすこい、それかくときれいよ。すこいすこい。」

子どもたちは楽しそうに話しをしながらぬる。竹の棒でけずってどの色が出るか試してみたり、友だちのをみたりしてきれいに色を出る色を考えてぬる。やがて竹棒でけずったときまざまな絵がかけ、先生に出しに行く。先生は「あら、ここおもしろいわ

ね。」「あなたのもようね、あらいいわね」といいながら一枚一枚受け取る。ねずみ色をつかってよく出た子に、先生「あら出たわね。よく出たわね、先生へただったのね。ぬりかたがいいなかったのね。ちゃんとよく出ている。ここもおもしろい。ちゃんと考えてあるのね。」(人間の頭の形に色が変わるところを指してほめる)もう一枚やりたいと言う子、ままごとや箱積木、おにごっこ、大工仕事などに移る子まぎまぎである。

三つの記録をよみながら考えられることは、一方は先生と子どもの関係は縦の関係、他方は横の関係だということです。すなわち、一方は命令と服従の人間関係、他方は先生の意図した絵にみな参加しているながら、子どもが「紙ちようだい」と自発的に参加しており、「これでいいんだ、ああおもしろい、これだ、これ一番よくつくぞ」と子どもが自信をもって自分の考えた色をぬり、先生に「全部同じ色でもいいのよ」と言われても「かえた方がきれいですものねえ」と自分の意志を主張する自由な人間関係が成立しているということです。

命令と服従の人間関係には、当然、おしゃべりをしていたり、よそ見をすることの禁止、先生のいった通りにしない場合の「どうしてこんなにしたの」などの批判がつきものです。また「お口に出してはいけません。だまって自分の思う色をぬりましょう。」「だまって先生の言う通りにしましょう」と製作中は子ども同志の友だち関係は生まれる余地がなくなります。これにひきかえ、△例3Vのように、自由な人間関係の中では、子どもの発言、子ども同志の会話が非常に多くなります。このことは子どもの逸話記録をとるとたいへ

んよく表われます。子どもはいっしょうけんめい工夫し、そのちょっとした工夫も「あらおもしろいわね」と先生に受けとめられ、「ああおもしろい」と喜んで絵画製作に励んでいます。一刻もじっとしてられないように、絵がすんだら砂場へとんでいって、またすばらしい池やトンネルをつくり、それから友だちとおにごっこをし……と次々に活動探求をしています。この子どもたちは私には「この紙が折れたら机の上においてだまって待ちましよう」と、ワンステップ、ワンステップじっと待たされ、製作の時間より待つ時間の方が長い世界にいつもおかれる子どもたちより、生きいきと活動しているように思われました。そして「さ、製作をします。お口をむすんで、先生の方をみましょう」といってもなかなか先生の方をみないで注意される子が何人もいる、というのがどこでも普通にみられる場面ですが、△例3▽では、先生がだまって画用紙に色をぬり出すと、すぐ近くにいた八人の子どもたちが集まり、次々と子どもたちの方から先生に「何するの」と寄って来てどんどん始めています。子どもたちは自由に遊んでいながら、先生の行動にいつも注意をむけ、先生が何も言われなくても、自発的に先生の意志に従っています。「おやおや、これは何のおうちかな」「今度何しようかな」などという先生のモノローグにも敏感に反応します。砂場でも、箱積木でも、ままごことでも、先生から「洗いましたか？ あはははははは、たいへんですね。しぼれましたね。(おもちゃの洗濯機でしぼっている) うまい具合にいったじゃない」と声をかけられる子どもたちは、いっしょうけんめい工夫して、複雑な構成あそび、グループあそびを考え出します。そしてその体験を絵に、粘土に豊かに表

現します。先生も、おとなには考えられない、子どものおもしろい表現に驚かされ、一人ひとりの個性を発見しながら、楽しく毎日の保育をしておられます。

○子どもと子どもの人間関係

次にもう一つの例をみましょう。

△例4▽

うちの絵の印刷したものを子どもたちに配る。

先生「これなんですか。」

子ども「うちわ。」

先生「うちわには何があるでしょう。」

子ども「うし」「ふね」「ついてない。」「ついてないのもある。」

先生「うちわに自分ですてきな絵をかいて立派にしてください。もようでもいいです。最初に考えてみましょう。」

A男「かいていい?」

先生「はいかいてください……どんなうちわができるかしら、さあ先生どのうちわ買おうかしら、自分の好きなようにお話しなideかきましょう。」

子どもたちはたいへん静かにかき始める。時々「先生ここから同じ色ぬっちゃうの」などと質問する子がいる。先生はぐるぐる歩きまわりながら「そうですよ」「好きなようにしてください」と返事。

B男「先生、こういう白いとこみんなけすの?」

先生「きれいなもようつけましようっていったでしょう。」

先生はかきかけの子に、「きれいなもようつけましようって
いったでしょう。さびしいわね。」

C男「先生なんでもいいの？ 飛行機でも、ヘリコプターで
も。」

先生「なんでもいいですよ。」

C男「〇〇幼稚園かいちゃおうかな。」

しばらくしてから

C男「二つかいていい？」

先生「さっきなんでもいいっていいましたよ。」

またしばらくして

C男「雪だるまかいていい？」

先生「あなたはさっきから何いつているの？ なんでもいいっ
ていったでしょう。」

その間にかけた子が何人か先生に出す。

△例3 Vはぬりつぶしたクレパスの上へ竹棒で自由画をかく、

△例4 Vはうちわに自由画をかくという場面です。△例3 Vでは

I男「くもりこれ、いろんな雲あるぞ。雨雲とか、入道雲の
れるぞ。あのね、どうやってのぼろうかと言うと、ヘリコプタ
ーでスースーって。」

G男「楽しいだろうな。」

I男「グライダーははらっぱへおりられんだぞ。」

G男「ヘリコプターは、これがこういうふうになっているんだ
よな。ところがグライダーはこういうふうになっていて、ドア
がかいてあるんだ、だからいいぞ、でも失敗するとあぶないよ。」

などと友だち同志話しながら楽しそうに絵をかいてきます。「もう
一枚やろう」「今度はもっときれいなものをつくるわ」「わたしも」「何
色でしようかな」ともう一枚やる子もいます。

△例4 Vでは、何回も「先生なんでもいい？」「何かこうかな」

「ここもぬるの？」と終りまで質問している子が何人もあります。

おしゃべりが禁じられていますので、子どもの会話は、ほとんど先
生への質問です。友だち同志が「うわーE子ちゃんのいいわね。き
れいですてきね」とほめ合ったり、「赤色でる？」「でる、こんなに
でちゃった」「わあ、でるか」と教え合ったりする光景はみられま
せん。また、友だちのおもしろいのを参考にして、さらに自分の工
夫を加えておもしろいものをつくり上げる場面もみられません。同
じように自由画がかけても大きな違いがあるように思われます。

○絵画製作中の子どもの会話、ひとりごと

J男「はながならんで咲いていました。そこへおにいさんとエ
スがきました」などとひとりごとをいいながらかいている子。

F男「ガガガー、スーパーマン、あのねこういう羽根なんだ。

飛行士帰っちゃうんだ。」

E男「あのインデアン強そうだな。」

B男「トント？」

K男「そう、おもしろい名前だな。」

と絵と関係のある会話。

H男「浩宮一歳だぞ。一歳だぞ。」

I男「この位のトラックあったらう？（玩具のトラック）あれ

にのっちゃうんだ」と絵と無関係な会話。

子どもの絵画製作中の会話はたいへんおもしろいものです。ふだん無口の子どもも「これが交番、その横に信号があって……」などと、次々にひとりごとをいいながらかいていたり、友だちと絵と無関係なおしゃべりをしながら楽しそうに絵をかきます。

これらの会話はどうして禁じられなければならないのでしょうか。「だまってかきましよう」と言われたら、何もかかなくなる子もいるのではないのでしょうか。

○絵画製作上の注意

△例5 V

先生「粘土するときはどんなことに注意したらよいでしょう。

水をかけてにとりに行ってつけないこと。」

「あんまりどんどんたいてはだめよ。」

ちようどよいやわらかさにしめされた粘土のおだんごが、並んでいる子ども一人ひとりに順に渡される。

多くのところで、与えられた以上に水を使うことは禁じられています。また砂場でも水を使うことが禁じられています。この子どもたちは、いろいろなところへ水が流れるおもしろい池やトンネルをつくる経験を、いつ味わうことができるのでしょうか。いつお友だちといっしょに砂場に大きな動物園や、飛行場をつくる工夫をするることができるのでしょうか。いつ、どのくらいのかたさが粘土細工にはちようどよいということを見えるのでしょうか。そして先生やお友だちと、その喜びをいつ語り合うことができるのでしょうか。

○最後に

△例6 V

先生「今日は白いまんまにしました。思うようにやってください。自由ですよ。先生がぬってあるのもって来ると、みんなまねするといけなからもって来ませんでした。のうさぎはいろんな色があるでしょ。あまり暗い色は使わないでください。」

S 男「先生 水色ぬっていい?」

T 男「ぼくは水色ぬろう。」

先生「自分で思った色ぬってください。」

Y 男「黒でいい?」

先生「自分で思ったならなんでも結構。」

絵画製作を通して子どもが自分を表現する喜びを味わい、自分の思ったことが相手に通じる喜びを味わうためには、先生と子どもがいつも自由な、民主的な人間関係のうちに生活していることが必要なのではないでしょうか。ある絵画製作の時間だけ急に「さあ自由ですよ。なんでも好きなようにかきなさい」と言われても、子どもたちはおきまりのチューリップや、飛行機しかかけないのではないのでしょうか。また△例6 Vのように、子どもたちは不安で何回も「かいていい?」「水色ぬっていい?」と質問しなければいけないのではないのでしょうか。先生がたびたび「自分で思ったならなんでも結構」と繰り返しても質問が続いています。

共に先生も子どもも喜んで生活し、ぐんぐん成長していけるために考え、研究してまいりたいと切に願います。

(お茶の水女子大学児童学科研究室)